

## 珠算学習の本質

### ☆入会動機あれこれ

保護者の皆様方は様々な思いや目的をお持ちになって、子どもたちを当教室に通わせていただいているものと思います。もちろんそのきっかけは単に「近いから」という理由だけの方もいらっしゃるでしょうが、なかには多くの習い事の中からわざわざそろばんを選択して下さり、そして数多くあるそろばん教室の中から当教室を選んでくださっている方もいらっしゃるかもしれません。

私から当教室へのご入会の動機を質問することは稀です。話の流れでそうなったことは数回あるかもしれませんが、意識して尋ねるようなことはありません。

興味が無くはないのですが、本当に「近い」という理由だけで選択しましたと宣告されるのも、今の首相風には「いかがなものか」という気がしますし、かといって「どうしてもおたくに...」と少女漫画的瞳キラキラ状態で迫られましてもプレッシャーに押しつぶされそうで結構ズシンと来るものがあります。

まあ、どういう理由で入会されるにしろ、お子様の成長期にそう短くはない時間を私と共に過ごすことになるわけですから、ズシンと重く受け止めるのは当然のことですが、本心を言えば、ご入会の理由を聞かないのは、生徒やその保護者の皆様に無用な先入観を持ちたくないという願いや狙いがあることです。入会動機に“目的”の違いがあることは当然ですが、動機に“優劣”までもがあると一方的に私が決めつけてしまうと、今後の心境に少なからず影響を与えてしまうと危惧しているからなのです。日頃、立場上子どもたちには偉そうな口ぶりで接することもままありますが、しかし私とて感情に流されやすい弱い部分を持っていることを重々自覚しています。だからこそ...、先入観や一時の感情によって支配されやすいという自覚を持っているからこそ、あえて危険領域に最初から足を踏み入れないでいるのです。

さてさて、先に入会動機の“目的”について違いがあると書きました。今までお伺いした中での主なものは、「計算力(暗算力)養成」「能力(脳力)開発」「集中力養成」「学習習慣の確立」「しつけ」「人間性向上」「社会性向上」などがありますが、大多数を占めているのは、やはり「計算力(暗算力)養成」です。

テレビなどでよく取り上げられるフラッシュ暗算が好例ですが、珠算式暗算の威力には凄まじいものがあります。たとえば「 $262016 \div 712$ 」。当教室の卒業生と現役生だけで数えてみても、この問題を5秒以内で正答を記入できるのは数十人います。3秒で正答すると10段ですが、除暗算10段相当の実力を持つ卒業生・現役生は10名ほどいて、1~2秒、すなわち前の問題の答えを書きながら次の問題の計算を終了させていて、見ている人の目には答えを書き続けているように見えるほどの実力を持つ生徒も5名程度います。1題2秒というのは、筆算式だと、まだ問題すら写せていないほどの時間ででしょうか。

これほどまでの計算力(暗算力)が養成される訓練は珠算学習において他にはありませんから、珠算学習の第一目的として「計算力(暗算力)養成」が挙げられるのは至極当然のことでしょう。

しかし、この地で開塾して10年目に突入した現在の私の胸に去来するのは、もしかすると「計算力(暗算力)養成」努力によって得られる計算力は、珠算学習に熱心に取り組んだ結果ついてくる「おまけ」や「ごほうび」のようなものではなかるかという、確信にも似た思いです。

### ☆入会直後

では、「おまけ」や「ごほうび」を生み出す本丸は何かといえば、それはとても抽象的な表現で恐縮なのですが、「珠算学習そのもの」に違いないのです。

入会1日目。ふつうは保護者の方が横につきます。子どもたちは私の視線と保護者の視線の二つを意識しながら、おそるおそる、かつワクワクしながら第一歩を踏み出します。

未知である私の視線に対する不安を、既知である保護者の方の視線で和らげながらゆっくりと進んでいくのです。しかし、やはり少し緊張感の方が勝っているようで、私から「大丈夫か？息、吸ってるか？」と聞かれる人も多いものですが、真新しいカバンや教材に筆箱、下敷きに鉛筆、いくつかのカード類、そして新たに購入した人は新品のそろばん...、これらのグッズに囲まれて、不安もどこかへ飛んでいき、期待に大きく胸をふくらませて元気よく帰っていきます。

ところが、運命の2日目。頼りになる保護者の姿はありません。ありとあらゆることを自分でやらなければなりません。教室に入る前から、出てくるまで、おそらく緊張し通しでしょう。学校では、自分一人だけが知らずに、他の人たちが知っているという場面はまずはありません。新入学にしろ進級にしろ、全員が同じ条件ですから、「知らない」という不安感をことさら一人だけで持つことはありませんが、すでにまわりが「できあがっている」珠算塾では、自分だけが知らないことばかりです。出席カードはどこに出すのか、バーコードカードはどこで読み取らせるのか、どこに座ればよいのか、座ればまず何をするのか、誰に採点を依頼すればいいのか、どこで教えてもらうのか、などなど、教え上げれば数多くの「？」が次々と襲ってくるのです。

これらの不安な気持ちは、わずか1週間もすればほとんどが記憶の彼方に消え去るほどのものなのですが、入塾直後は矢継ぎ早に与えられる作業指示と行動指示に、さぞかし面食らうことでしょう。

しかし、実はこれらは、今後遭遇する様々な試練のほんの序の口にしか過ぎないのです。

☆「教えてくれない・教えない」のは変？

「わかりません。教えてください」と、生徒。「わかります。教えません」と私。

そう言えば、現在非常勤講師として午前中にそろばんを教えに行っている立命館小学校宛に、保護者から送られてきた手紙を思い出しました。曰く、「テキストに『先生に教えてもらいましょう』という表示があるのに、金本先生に質問に行っても教えてもらえないのはおかしいのではないのでしょうか」と。

字面だけを見れば確かにおかしいに決まっています。テキストを作った私が言うのですから間違いありません。

しかし、私の学校側への返答は次のようなものでした。「『教えてもらいましょう』というのは、何もやり方だけを教えてもらうことを意味しているではありません。既習事項に少しの知恵と洞察と根性をミックスすると、何も教えなくともできる可能性があるということを『教える』場面もあるのです。そしてうまく事が運んだ場合、教えられて得た知識の何倍もの知恵と経験が生徒に宿るのです」。専任の先生は、頭を抱えていましたが、その後どんな返答をその保護者にしたのか私は知りません。

教えることが嫌だったり面倒だったりして教えないのではなく、教えない方が教えることよりもよほど教育効果があると判断したり、自力で乗り越えられるほどの課題を目前にして、その課題を乗り越えられるだけの実力をその時点で蓄えていると判断される場合は「教えない」というよりも「待つ」のです。逆に必須指導箇所以外でも指導が必要だと判断した場合は、即座に「そろばんを持っておいで」となるわけです。

「わかりません」と持ってくる生徒の大半は、課題の困難さを自己の持つ力だけで打破ることに自信が持てず、依頼心が表出した状態になっています。ですから、こういった場合には「いや、自分でわかるぞ」と励ましてあげるだけでたいい大丈夫です。

「同じ答えになる」という訴えを持ってくる生徒には、誤答になる原因を即座に見つけて、まずは大きなヒントを出します。これは既習事項を守れていないことに原因がありますから、既習事項を思い出させるわけです。それでも同じ過ちを繰り返すと、これは既習事項を間違えたまま理解していることになりまますから、改めて別の例題を出して指導し直

し、当該問題に再度チャレンジさせます。質問が発生している問題そのもので教えないのは、ここでもやはり最終的には自分自身で決着をつけてほしいからに他なりません。適切な例題が思いつかない場合や、複数人が列をなして採点待ちをしている場合などは当該問題で直接指導する場合がありますが、その場合でもそろばんに正答がでた瞬間に私はわざと「地震だ!」「台風だ!」などと叫びながらそろばん面を崩して、生徒自身にもう一度自席で答えを出させます。

幾度も違う答えを出す生徒の場合は、目前で計算させる場合があります。これは何も考えずに次々と進みたがる生徒に多いパターンですが、生徒が計算をする前に「先生はあなたが間違えた瞬間に大声で叫びます。そうするとみんなびっくりするので、大迷惑です。すべてはあなたにかかっています。慎重にやりなさい」と宣言します。生徒は恐る恐る計算を始めていき、なぜか他の生徒が固唾をのんで状況を見守るという変な空気が教室に漂います。そういう私も叫ぶ本人に違いないはずなのですが叫んでおきながら自分自身でびっくりしそうなのが嫌で、生徒が間違えそうな雰囲気を出したり、今まさに違う珠をさわろうとする瞬間に「ンンン!!!」と低い声でうなってみたり拳をワナワナと音を立てて震えさせたりして、生徒にそれとなく危険領域に足を踏み入れそうなことをにおわせながら、何とか叫ばずに事を収めるのですが、しかし、こんな場合でも多くは「なんか、質問するようなところ、あった?」と私も生徒も拍子抜けするくらいスムーズに正答を出します。誤答原因は緊張感の欠如と集中力切れなのでしょう。

「珠算学習の本質」を書こうとして、どんどん本質から離れてしまっていますが、脱線ついでにもう少し…。

「質問するのは良いことだ」という言葉を勘違いしている人がたくさんいます。この言葉には前段階として、「質問する前提となる課題や指示をちゃんと見聞きしていたか」「内容を熟考したか」という点があるのですが、これらが欠落したままなのです。

大会や教室で、私はよく「一度しか言いません。そのかわり誰にでもわかるように言います。座席に座ったまま口々に質問しても受け付けません。どうしても質問したいことがあれば、私のところに来て質問してください」と宣言して指示を出します。これだと「わからなければ誰かにがすぐに教えてくれる」という安易な気持ちで漫然と見聞きするわけにはいきません。緊張感が生まれます。質問もほとんどありません。さすがに指示を理解できないであろう年齢の生徒や、不慣れな生徒にはさりげなく救いの手をさしのべますが、それとでもそれらの生徒が少しがんばれば手が届きそうなところまでに救いの手をとどめておきます。

白状しますと、実はこの緊張感には私にも生まれるのです。先の注意を耳にした生徒の耳目は一瞬にして私に集まるわけです。自然、発する言葉に意味を持たせる必要が否応にも高まり、これが無駄な発問や言葉がけの排除につながって、授業にテンポとリズムが出るという好循環になるのですが、逆に過保護が生み出す悪い例を一つ書いておきましょう。

親切だと勘違いして行う指示の繰り返しは、実は子どもの依存心を増長させるのです。

運動会シーズンが過ぎましたが、保護者や生徒の皆さんはこんな光景に遭遇したことはないでしょうか。(架空のものです。)

朝礼台(指揮台)にマイクを持つ先生Aが一人。マスゲームのために整列している生徒の間を見回る先生BCDの三人。A先生が大声で指示をします。「今から音楽を流します。音楽が鳴り始めてから、3秒後に回れ右をして、5歩進んで高く垂直跳びをきなさい」。

よせばいいのにBCDの三先生は口々に「いいか～。3秒後に回れ右をして5歩進んでジャンプするんだぞ～」と言いながらキョロキョロ生徒を見回しつつ歩を進めます。

目を開けて寝るのが得意な生徒TはBCDの三先生が思い思いの順序で言う数字が頭の中でごちゃ混ぜになって「3秒間歌を歌って5回ジャンプする」と聞き取ります。

また繰り返しの質問に食らいついて即座に確認することを特技にする他の生徒約15名ほ

どは、この時とばかりに三先生の指示の繰り返しをまたまた繰り返します。

その様子を指揮台から見ているA先生は、生徒がざわつき出したことからさらに大きな声を出して「音楽が鳴り始めてから3秒後に後ろ向きに5歩進んで跳ぶのだ〜〜〜」とやります。たまたま目を開けて起きていたTは、パニックです。15名は「どちらに跳ぶのですかー？」

これを修羅場といいます。

#### ☆短所を自覚し、長所に変える

そろばんの練習は「物事を正確に早く処理する訓練」です。

珠算1級の見取算は10桁の数字を10個足したり引いたりする課題で、平均すると1分以内に正答を得ると合格となります。実際の試験では、かけ算20題、わり算20題、みとり算10題をまとめて30分で計時しますので、各種目を仮に10分ずつに等分すると、みとり算は平均1題1分となるわけです。1題の総字数は100字で、指が動く回数は1題あたり200~300回くらいになるのでしょうか。途中わずかに1カ所間違えてもバツとなるわけで、何と99.7%正しいことをしていてもダメなものはダメなのです。こうして改めて文字にしてみると、とんでもなく困難なことをしているように思えてくるのは私だけでしょうか。

さて、信じられないかもしれませんが、3級を受験する頃になっても「11-6」を「7」としてしまいう間違いに陥る生徒が少なからずいます。「14-6」は間違いません。これはここでは詳しくは述べませんが、そろばんという計算器具の形状に起因する現象だと言えます。「100-1」を「89」にしてしまいう間違いも同様です。ゆっくり考えながら珠をはじいたり、間違いやすい問題ばかりで構成されていることを生徒が自覚して計算している時にはあまり発生しない間違いなのですが、試験の模擬練習や誤算原因を防ぐという意識をあまり持たないまま計算するような、いわば、ある「流れ」の中だとママ見受けられる間違いです。

前述した「同じ答えになる」という訴えで生徒が質問に来ます。対面で計算させると、この間違いに陥っていることがあります。間違いたその瞬間にストップさせ、今まさに生徒がした計算を私が再現したり、生徒に再現させたりします。ここで生徒本人に気づかせるわけです。自分が陥りやすいパターンを自覚させることで、これらの危険箇所に出くわしたときに失敗を繰り返さないように自分をコントロールする意識を根付かせるのです。

地雷原のありかを知ることによって安全なルートを確保するようなものでしょうか。

短所を長所に変化させるのです。

#### ☆ささやかな成就感とちょっとした挫折感の繰り返し

教室では次のようなちょっとした挫折感が次々にやってきます。

「完璧！」と思って提出した課題に無言でバツをつけて返される。

「会心！」と思った試験が無惨な結果に終わる。

一生懸命練習しているのになかなか点数が上がらない。

テキストを前の段階に戻された。

チャレンジして、やはり無謀だったと思い知らされた。

当事者には「なにが『ちょっとした』だ！苦しんでいるのに。」と叱られそうなものもあるかもしれませんが、私もすべて経験してきたことばかりです。終わってしまえば、やはり「ちょっとした」程度のことだと思えますし、また、成長とともに凶太くもなっていて、挫折感に「慣れ」もします。

また、教室では次のようなささやかな成就感も時には経験します。

ページが進んだ。

小テストで合格した。

最高点がでた。

いっぱいできた。  
最短タイムでできた。  
試験に合格した。大会で入賞した。優勝した。  
先生にほめられた。  
自分でできた。  
チャレンジして、成功した。

成就感ばかりを経験して大人になることも、挫折感ばかりに苛まれて大人になることも、どちらも良いことではありません。大切なのはバランスです。

珠算塾では、これらの経験を適度に得られる場面が、システムとして備わっています。そして、これらの経験の繰り返し、人間力を高めていくものだと確信しています。

ずっと「勝ち組」で育ってきた者は受けに回ると非常にもろいものです。向かい風が吹くと他者への攻撃でもって精神の平衡を保とうとして自他共に破滅に追い込む例が後を絶ちません。

逆にずっと「負け組」で育ってきた者は、自信喪失と積極性の欠如が顕著に表れてきます。何事にも興味を持つはずの低年齢期にこういった状況が続くと、健やかな心身の発達には非常に困難になってくるでしょう。

ちょっとした挫折感の中から闘志と希望を沸き立たせたり、ささやかな成就感を味わいながら慎み深さと謙虚さ、そして挫折感に耐えうる精神のビタミンを蓄積させる珠算学習……、私は史上最強の習い事だと心の底から信じています。

昔から日本各所に連綿と掲げられている「そろばん塾」の看板を汚すことのないよう、塾報100号発行の節目に、決意表明させていただきました。

#### ☆「勉強に生かせるポイント」(蛇足)

四則計算で言えば、中学生の数学や理科で、間違いなく珠算式暗算能力や珠算の練習で磨かれた計数感覚が生かされます。さらに、正確な処理能力は高等数学でいかに発揮されることでしょう。

たとえば3桁×2桁の計算が暗算でできると、面積・体積の計算や発熱量・オームの法則などの電気関係などなどで直接のメリットを体感できます。因数分解で、因数を案出するのも有利です。4桁の加減算ができれば、「15時38分の4時間46分前は何時何分？」というような計算も一瞬でしょう。

かりに、暗算力がそこまで備わっていなくとも、珠算学習で培われる様々な無形の能力は、漢方薬のような働きをして、体質改善につながっていきます。

上級者は1級の見取算を暗算で計算していきませんが、あえてそろばんを使って計算するように指示を出すことがあります。条件はただ一つ。「問題をパッと見て一瞬で暗記せよ」です。一瞬で覚えられる桁数は個人差がありますが、間違いなく言えることは、桁数は珠算や暗算の技術に比例しているということです。珠算技術は伸びる速度に個人差はもちろんあるものの、一人ひとりそれぞれが練習量に比例して伸びていくのは確実ですから、前述のような「一度に処理できる能力」が珠算の練習によって高まっていくのは明らかです。

せつかく何かの縁で飛び込んだそろばんの世界です。目標を高く持って、骨までしゃぶり尽くしてみませんか。